
リリカルなのはin蒼い犬

雷覇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはin蒼い犬

【Nコード】

N5416Q

【作者名】

雷覇

【あらすじ】

テイルズオブヴェスペリアのラピードが主人公の小説です。

設定（前書き）

ゲームをしたらわかります。ラピードかつこよすぎ、勢い余って書いてしまうほどに・・・

設定

テイルズオブヴェスペリアのラピードがリリカルなのはの世界にいたら、という話です。

ラピードは地球で生まれています。

一応幼少期から書きます。

ラピードはめっちゃめっちゃ強いです。強さはLV100を超えています。けどLVMAXではありません。

まだまだ成長します。

ちゃんとゲームの技を使用します。例 魔神犬とか

ゲームだとラピードは4歳半です、しかしここではあまり気にしないでください。

ラピードはなのはの相棒です。

なんだかんだ言っても犬です。基本「ワン」とか「くーん」とかしか言いません。

幼少期 第一話

良い子にしないと・・・・・・・・

だめになつた・・・・・・・・

お父さんが目を覚まさなくて・・・・・・・・

お母さんが泣いてる・・・・・・・・

お兄ちゃんが怖くなつた・・・・・・・・

お姉ちゃんが悲しそうに大丈夫だよって言って・・・・・・・・

良い子にしないと・・・・・・・・

・・・・・・・・だれか助けてよ

良い子にするから……

「……………」

お父さんが怪我をしてから今日でもう一週間

キィキィといつもの公園のブランコに揺られて一日が過ぎるのを待っている

家ではお母さんがお父さんのいないお店で頑張ってる

お兄ちゃんはなにかに憑かれたみたいに道場で剣を振り回してる

お姉ちゃんはお母さんを手伝いながら、お兄ちゃんをどうにかしようとしてる

邪魔しちゃいけない、良い子になくちゃって言い聞かせて。寂しいのを我慢してる

「うっ、うっ」

誰もいない公園で寂しさのあまり泣いてしまうのはいつものこと

「ふええええん」

これじゃダメだよ良い子にしないとイケないのに、泣いちゃダメなのに

泣く度にそう思う。けどいつも止まらない、そんな自分が嫌になる

ガサツガサツ

「ふえ？」

いつも誰もいないはずなのに今日は誰がいるの？

そんなことを考えてとっさに音のした方向を向いた

ガサッガサッ

「？」

見てみると誰もいない、音はするのに誰もいない

「お、お化け？」

昼間なのに、お化けが出るの？

そう思ったら怖くて、また泣いてしまいそうだ

「あ、あれは？」

よく見てみると公園の隅に置いてあったゴミ箱の下に蒼くてヒョロツとした何かが動いている

『ギャン！』

「ふえ！？」

ドサツとなにかが落ちる音がするのと同時になにか声みたいなものが聞こえた

『うつうつうう、ワン！ワン！』

「い、犬？」

あまり見ない蒼と白い毛をした犬だった

犬はゴミ箱によじ登り、中にあるなにかを取ろうとしているようだった

なのはお化けじゃなくてよかったと思いながら、恐る恐る犬に近づいた。

近づいて来るのはに一度目をやると、あまり気にしなかったのかすぐにまたゴミ箱に向かっていく

「あ、ちっちゃい」

近づいてわかったが犬は、まだまだ小さく産まれてそんなに経ってはいないのではないかと思わせた

『わん！！わん！！』

小さいと言われたのが、まるで不服だと言つようにこちらに向かつて吼えてきた

しかし、先ほども言ったようにまだ子犬。吼えられても恐怖を覚え

ずに、逆に可愛らしかった

「ふふっ、ごめんね小さいなんて言っ
て」

犬が自分の言葉がわかるはずない、わかっていたがそつ口に出して
いた

『バウッ!~!』

犬はわかればいいんだと言って来ているようで、また笑みがこぼれた
一週間ぶりに心から笑えた。そんな気がした

「なんで、コニ箱なんか?」

『わん!わん!』

疑問に思った事を口に出したら、いつの間にかゴミ箱から降りてきた犬が見てくれというように顔を向けた

まだ背の小さいのはは背伸びをしてゴミ箱の中を見た

そこにはフライドチキンの骨だろうか、まだ腐ってもいない最近捨てられたようなものであった

「・・・もしかして、これ？」

なのはは指で指して言った

『ワン！！』

正解だ、と言っているのか。小さく尻尾を振りながら吼えた

「だ、だめだよ！　こんなの食べたらお腹壊すもん！」

『ワフッ!?!』

いきなり大声を出したので子犬はびくつとした

「・・・・・・・・こつち」

『わう?』

「来て!」

なのはは子犬を抱き上げて家へと向かった、子犬はいきなりのこと
で少し暴れたが、疲れたのかこてんとして大人しく抱かれた

犬は野良犬だっただろうから、汚れていた。

それを抱いているのだから服も汚れた

良い子にしないと、と思っていたのに、気にしないといったふうに
ギョッと抱きしめた

「（すごく、軽い）」

そう思った。子犬だからというわけではない。抱いてみると、肉が全然付いてないことがわかった

「（こんなに、服汚しちゃった。・・・怒られるかな、お家はまだみんな大変なのに）」

「・・・けど、笑わせてくれたもん」

この子にはそんな気はないだろう。けど自分はこの子に笑わせて貰ったから。本当に笑顔になれたから

「家に着いたら、ご飯あげるからね」

いや、こっじゃない

「ご飯、食べてくれないかな？」

笑顔で言った

『わん！』

今まで黙っていた犬が少し元気に吼えた

第二話

「それでね、昨日お父さんが起きたんだよ」

嬉しそうに自分と隣にいる存在に声をかけた

『わん！わん！』

この子と出会ってからもう2週間くらいだ

初めて出会ったときは無理やり自分の家に抱いて行って、余っていたご飯をあげた

すごい勢いでご飯を食べて、すべて平らげてもまだ足りない、と足にすり寄って来たことを覚えている

流石にどうすることもできず、自分の部屋で連れて行き大人しくしてねと言えば犬は言われたとおり大人しくした

その夜の食事が終わってからこっそりと自分がわざと残した物を食べさせた

お母さんに心配かけたかなと思いつつも犬のことが心配だった

寝る場所をどうしようと考えたと自分のベットの下に隠れるように寝ている犬を見つけた

みんなに見つかりませんようにと祈りながら、疲れでぐっすりと眠った

朝になったら朝食のあと、また見つからないように外に連れ出しコンビニでドックフードを買った

子供の自分はお金はあまり使うことはなくお年玉も手つかずで残っていたため問題なかった

犬はドックフードを食べ終わると、頭を下げて公園に走っていった次の日、また公園に行った。わんちゃんと呼ばばあの犬がひょっこりと顔をだし走って寄ってきた

そしたらいきなりかるく吼えてきたので、どうしたのか聞けば、わんちゃんと呼ばれたのが嫌だったみたいだ

そしてこの子に名前を付けた

ぽちとか太郎とかそういう名前は嫌だったようでラピードと名付けた名前が気に入ったのか嬉しそうに吼えて寄ってきた

それから毎日のように公園に来ては、ラピードと遊んで、お話をした。

ラピードはただ吼えるだけだけど、聞いてもらえるだけでよかった。

そして、昨日やっとお父さんが起きてみんなで泣いて喜んだ

それを聞いてほしくて、いつものように公園に来ていた

「ねえ、ラピード」

『わっ?』

「私とこない?」

『…………』

私はこの2週間でラピードのおかげで、救われた

一緒にいたのはたった2週間だけど、これからも一緒に居たいって
思う。だから……

『バウッ!』

「家族のみんなには言ったよ、良いって言ってくれた」

お兄ちゃんには反対されたけど。けど一度反対されたから諦める
くらいの気持ちじゃないんだよ。

「ラピード」

『わん』

「えっ!？」

驚いた、私から抱きついてもラピードから飛び込んできてくれたこ
となんてなかったから

「これは、良いって事？」

『わん！』

返事をしてくれたことに嬉しく思い、私はラピードを抱きしめた

「これから、よろしくねラピード」

『わおおおん』

こちらこそというようにラピードは大きく遠吠えをした

「ほら、じっとして」

『くーん』

「情けない声出さないの」

ラピードが家に来てからもうすぐ、1ヶ月

ラピードのことも前より知ることができてきた。

例えば犬なのに犬扱いされる事が嫌い、とか以外にも水が怖いとか弱味を見せたくないのかいつも我慢するけど、本当に犬らしくないと思う

今もシャンプーするのが嫌でバタバタと暴れるし

『グウウ』

「うならないの」

ゴシゴシとようやく諦めて大人しくなったラピードを洗う

やせ我慢してるんだね、足が震えてるよ？

「それじゃ流すから、暴れちゃダメだよ？」

『ワンッ！ー！』

「はいはい、バカになんてしてないよ」

けどラピード？すごく足がガタガタってなってるよ？

私にくらい弱いとこ見せてよ、まったく

「はい、終わり。よく我慢できたね、偉いよ」

『ガウッ!』

我慢なんかしてないって？ホントに強情な・・・

「乾かすから、こっちおいで」

ドライヤーのスイッチを入れると、尻尾を振りながら嬉しそうに寄ってくる

乾かされるのは好きなんだよね

「よし、お終い」

『ワン！！』

「うん、それ無理」

だってお風呂にはちゃんと入らないとダメじゃない

毎日一緒に風呂に入ってるんだから、そろそろ慣れなさい

『わふ』

そんな疲れたよ、みたいな目でため息つかないでよ。私は一緒に良
いんだから

ちなみに流石に浴槽には入れてない、というより入ろうとしない

だから私がお湯に浸かってる時、ラピードは身体を冷やさないよう
に我慢して使ってなかった洗面器に丸まって入ってる

「もう寝るよ?」

寝るときも一緒が良いんだけど、ラピードは自分の分の小さい毛布を引っ張ってくると器用に丸めてその上で寝る

私のベットがあるというのに・・・わかったよ、またため息ついちゃって

「お休みラピード」

『わん』

いつの日かあっちからベットに入ってきて来るぐらいにしよう、と胸に誓って眠りについた

第三話（前書き）

今回はテイルズの技使います

第三話

ちゅんちゅんというスズメの鳴き声とカーテンの隙間から入ってくる日の光に、目をこすりながらなのはは目を覚ました

「ラピード」

『わん！』

「うん、おはよう」

朝起きてまずすることは、自分の相棒への挨拶だ

今日は日曜日なのでラピードといっぱい遊べる

「よし、ご飯たべに行こう」

『バウッ!』

朝食を食べ終えて、ラピードと森を散歩したときに見つけた少し開けた場所。空き地のような場所に向かう

「うん」

『・・・・・・』

「魔神剣!」

ブンツと手に持った小さめの木刀を思いっきり振るう

フッ

「あー！もうなんで出ないかな！！」

『わふー』

「そんなことないよ！昨日はもっとできたんだから」

ラピードはなににも言わずに自分専用の木刀を咥えた

『・・・ガアッ！！』

ラピードの木刀から放たれた衝撃波はなのものより大きく、長い距離を走った

「にゃああー！！　なんでできるのぉー！？」

自分の家に来た日からラピードは道場にあつた木刀（小太刀）を持ち出し、気に入ったのか振り回したらなんと今のような技みたいになにかまでできるようになっていた。

本当に自分の相棒は何者なんだろうか、普通の犬では絶対できないラピードの犬離れた技を見てから、自分もやってみたいと好奇心に動かされラピードの木刀と同じくらいの物を持ってきて、近くの森の空き地で練習をしているのだ

「もう一回！」

せっかくの日曜にやることではないのかも知れないがなのは楽しかったのだ

最近なんかワイルドになってきているのはだった・・・

SIDE???

「ちょっと、あんた！ その猫あんたの子でしょ！？ だったら泣かないでしっかりしなさいよ！」

「だ、だって」

「あゝ！ もう、泣かない！」

「わん！！ わん！！」

「ひゅっ！！？」

やばい、どうしよう。それが今の気持ちだった。

知らない女の子が子猫を抱いているのはわかったけど、まさか犬に追われていたなんて

「あ、あっち行きなさいよ！ あんたみたいなおっきいのが小さい子いじめるなんて最低なんだから！」

「わん！わん！」

「あ、あっち行つて。お願いだから・・・」

子猫を抱いた少女も怖いのか弱々しい声で言った

犬は大型犬だった。子猫を狙ってるのはなんとなくわかる。

首輪がついてるから飼い犬なんだろう

「（ちゃんと管理しときなさいよ）」

ここにはいない犬の飼い主に恨みをこめて呟いた

「大丈夫だからね、もうすぐ私の知り合いが来てくれるから」

「にゃー」

「あんたも、怖がらないの。大丈夫だから」

そうだ、彼の目を盗んでここに来たけど、私がいらないことに気づいて探しているはず。

すぐ近くなんだから、見つけてくれるはずだ

「（それまで、吼えてもいいから来ないでよ）」

そう祈った

「バウッ!」

さっきまで、少し距離を置いていたのに。

なにか知らないが走ってきた。

「やだ、やだやだ!! 来るな!!」

「っ!」

私たちは怖くなって、子猫を抱きしめながらギュッと目を閉じた

「ガウッ!」

ガツンツと鈍い音がしたが、痛みはこなかった

そつと目を開けてみると、視界に入っただのはさっきの犬と、立ち塞がるように立っている蒼と白の毛をした子犬だった

S I D E ? ? ? E N D

S I D E なのは&a m p・ラピード

「ほら!さっきより大きいのが出せたよ」

『くうーん』

あれからずっとラピードと一緒に技の練習をしていた

初めの頃より確かに大きな衝撃波を打ち出す事ができている

それでもラピードのものより半分くらいだった

けれど見よう見まねで形になってきている

なのはもしかしたら剣の才能があるんじゃないか

ラピードはまだ子犬のくせに、そんなことを考えていた

『ガウツ!!』

——
魔神剣
——

打ち出したのは、なのはが打ったものの倍は大きかった

「むづうう!!」

負けず嫌いが発動したのか、また思考錯誤しながら剣を打つところ
や力をどこで入れるかを考え出した

そんなのはを見て木陰でそろそろ昼寝でもしようとしたときだった

「わん！」

犬の声が聞こえた、それだけなら別に变じゃない

だけど他に鳴き声が聞こえた。聞こえた声より、もっと小さい声

それと・・・

「あ、あっち行きなさいよ!!」

聞こえた。どこか必死な声が聞こえた

この声は自分が犬だから聞こえたのであって、人間には拾えないほどの声だ

現になのはは聞こえていないようだった

『・・・・・・・・』

スツと立ち上がり、声のする方に走り出した

「ラピード!?!」

いきなり走り出したラピードに驚いたなのはが大きな声で名前を呼んだ

『ワオン!?!』

ついてきてくれ!そう込めて吼えた

伝わるだろう?相棒なのだから

「っ! わかった! 先に行つて!」

『バウツ!!』

声のした方へ駆けてゆく。森の木々を上手く躲しながら子犬とは思えない速さで駆ける

森を抜けて、なのはと出会った公園へ入る

見つけた。女の子二人、猫一匹。そしてそれに飛びかかろうとする犬が一匹

『ガアアア!!』

スピードを落とさずに迷わず犬に向かって体当たりを喰らわせる

「ギャン!?!」

吹っ飛ばした犬を一目見て、後ろの女の子達を見る

「え、えっと」

『バウ?』

「だ、大丈夫です」

間に合った事に安心しつつ、起き上がった犬を見つめた

子犬の自分の力では、フルパワーの体当たりでも大型犬を倒すには
至らないようだ

「あ、あんたは逃げなさい! あんたが勝てるはずないでしょ!？」

心配してくれているらしい、金髪の少女が言った

『わおおおん!!』

心配するなど、不安を消すように大きく吼えた

少女達二人は口をポカンと開けている

「うっううっ!!」

先ほどの一撃で怒ったのか、唸りをあげてこちらを睨みつけている

『・・・・・・』

ラピードは考える。力では勝てない、かといって後ろには少女達がいるので退けない

『・・・・!!』

相手のかみつきを小さく左右に動いて躲す

少しの間、回避に専念し倒す方法を考える。

といつても力がないので急所を狙うしかない、狙うのは腹だ。犬の腹は総じて柔らかい

だがどうやって腹に潜り込むかを考えていた

「があっ！！」

『ワオンッ！！』

閃いたように目を見開き吼えた

—— 弧空旋牙 ——

「ガアッ！？」

バク転をしながら自慢の長い尻尾で相手の顔をバチンッと打ち上げる

ようするにアッパーを喰らわせたような感じだ

身体も少し上に上がり腹が無防備になった

ラピードはその瞬間を逃さない

——瞬迅犬——

瞬時に腹に突進をかまし吹っ飛ばす

吹っ飛ばされた犬は気絶したのか、こてんとなった

少女達は目の前で起こったことに驚きを隠せなかった

子犬が成犬であろう大型犬を相手に勝ったのだから

『ワオオオオン！！ワン！！ワン！！』

ラピードの勝利の雄叫びが響いた

第四話

ラピードが犬を気絶させてから、少し時間が経ってきた時に息を切らせた飼い主がやってきて来た。

少女達に謝り、犬を引き取って帰って行った。

恐怖の原因がいなくなり二人も安心して落ち着きを取り戻したようだ。

「ラピード！」

なのはもやっと追いついてきた。

『わん！』

ちゃんと追いつけたことに安心して、ラピードのそばにいる二人に気づいた。

「あれ？ ラピード、この二人はだれ？」

『わん！わん！』

「……ふむふむ」

『わおおん』

「そっか、さすがラピードだね！　すごいよ！」

そんな様子を端から見ていた少女達は思った。

「・・・あの子会話してない？」

「う、うん。　なんか成り立っているような・・・」

そんな二人になのはが近寄ってきて声をかけた

「大丈夫だった？　犬に襲われたんだよね？」

「「成り立ってる！！??」」

あり得ないと思えることを普通にやってきた。まさか犬に聞いてちゃんと事情が分かるとは・・・
なのはは何かの才能があるようだ。

「あの、大丈夫？　どこか怪我でもしちゃった？」

『バウっ！』

少し混乱している二人に対しなのはトラピードは心配そうな声をあげた

「だ、大丈夫よ！その子が助けてくれたし」

「う、うん。　私も大丈夫だよ。この子も」

「にゃん！」

ずっと怖がって丸くなっていた子猫も大丈夫なようだ。

「よかった。　頑張ったねトラピード」

『ワン！』

「ありがとね、助けてくれて」

「ありがとわんちゃん」

『がう!』

「えっ!?!どうしたの!?!」

「あはは! ラピードはわんちゃんって呼ばれるの嫌いなんだ」

「そ、そうなんだ。ごめんね、えっとラピード君?」

『わん!』

「ふふ、改めて自己紹介する? 私は高町なのはだよ。そして」

『わおん!』

「相棒のラピードだよ」

「わたしは、アリサ。　アリサ・バニングスよ」

「私は、月村すずかです。すずかつて呼んでください」

「うん！よろしくねアリサちゃん、すずかちゃん」

『わん！』

自己紹介したあと三人と2匹は公園で遊んだ。みんな動物が好きだったので意気投合するのにより時間はかからなかった

「でもラピードってすごいわね。あんなにおっきいのやつつけちゃったし」

「私もびっくりしたよ」

「そうだよねえ。　ラピードって他の犬にはできないこと軽々とやっちゃうし」

人にもできないようなこともするけど

「強いし、可愛いしモフモフだし最高ねラピードって」

『くうーん』

「めずらしいよラピードが大人しく初対面の人に抱っこされるなんて」

「でも本当にすごいよね、井上も懐いてるし」

「にゃあん」

「・・・もしかして猫の名前？ 井上って？」

「うん、そうだよ。この子も人見知りだから」

『「」「」・・・「」』

なぜその名前にしたんだろう。名前というより苗字じゃ・・・
心が一つになった瞬間だ

「もう、日が暮れてきちゃったね」

「そうね、そろそろ帰らないとダメかな」

「私も、鮫島に黙って出てきちゃったし」

ずっと遊んでいたから時間を気にしていなかったけど、もう夕焼け空だ。目に見えて時間がかなり経ったことを理解させた

「そういえば、鮫島ってだれ？」

「私の家の執事よ。目を盗んできたから心配かけちゃったわね」

「えっ、執事さんってことはアリサちゃんの家ってお金持ち？」

「そうね、お金持ちだわ」

こうストレートに答えるお嬢様もあまりいないんじゃないかと思わせるほど、あっさりと答えが返ってきた

「私も、お姉ちゃん達が心配してると思う。 帰らないと・・・」

「そっか、それじゃあ今日はここまでだね。」

「時間も気にしないくらい楽しかったの久しぶりかも」

「あたしも」

「うん、私もラピード以外でこんなに一緒に友達といたの初めてだよ」

『わう！』

「ラピードも楽しかったって」

なのは幼稚園の友達とも仲が良いが、家に帰ってくるといつもラピードと遊んでいたので、ラピード以外の友達と一緒にいてこんなに楽しかったのは初めてだと思った

「お嬢様」

「鮫島？」

「はい、そろそろ帰りませんと」

「うん、というより居たの？」

「ええ、なにやら楽しそうだったので近くで待機しておりました」

『わん！』

「そうだよ、おじさん不審者に間違えられちゃうよ」

「むむ、確かに、失態でしたな。以後気をつけましょう」

「ねえ！また遊ばない？今度は時間決めて」

「私も、みんなとまた遊びたいな」

「私もだよ。こんなに仲良くなった友達初めてだもん！　ねっラピード！」

『わん！』

「それじゃ次の日曜日。良いなら10時、場所はこの公園ね」

「うん！来週が楽しみになったよ。井上も連れてくるからね」

「それじゃあ、また来週ね」

「風邪とかひかないようにしてなさいよ！」

「うん、またねアリサちゃん」

「バイバイ、またね」

『がっ！』

「楽しかったね」

『わん』

なのはは帰り道で口を開いた。頭に思っているのは、新しくできた二人の友人の姿。ラピードも同じことを思っているだろう。

「ラピードも二人のこと気に入ったんだ」

『わん!』

「そうだね、良い友達になれそう・・・」

『バウ!』

「あつ、そうだね。もう友達だよね」

『わん』

「うん、来週が楽しみ。なにして遊んでるんだろうね、来週は」

また遊べるんだと口に出して、また笑う。

ラピード以外でここまで親しくなるなんて、会ったのは今日だったというのに……

「ラピードともなんでか一日で仲良くなれたよね」

『わん!』

「強引だった?……まあ、確かにね」

ラピードは出会って30分たらずで家にお持ち帰りだったし……
気の合う者同士は親しくなるのにあまり時間は関係ないということ
なのだろうか。

「今度は遊ぶときは、合体技でも見せてあげようね」

『わっ?』

「むうう！またバカにしてるでしょ！？ちゃんとできるようになるもん！」

『わん』

「・・・今日のお風呂は覚悟するんだよ」

『わっ!?!』

ラピードは逃げるように家に走り出す。なのはが笑いながら追いかける。

ラピードはなのはがついてこれる速さで走った。

なのははそれに気づいているだろう。なんだかんだと優しい相棒に小さく吹き出し、今日はなるべく早くお風呂から出ようと心に思っている。

「……ラピード」

『わっ?』

「浮気はしないようにね」

『わっ!?!?』

ラピードはその日毛布を深くかぶりいつもよりギュッと丸まって眠った。

なのはのニッコリと怪しい笑顔を忘れるように……

第五話（前書き）

井上は女の子です

第五話

『があああ!!』

「うおりゃあああ!!」

ギンギンと金属を金属で叩いたような音が森を支配する。
ラピードが戦っているのだ。

「でえりゃああ!!」

がたいの良い白髪の老人と・・・

『わおおおん!!』

———
魔神犬
———

自分の得意技を全力で放つ

「甘いわああ!!」

—— 太刀影 ——

老人の放った斬撃はラピードのそれを上回り、飲み込んだ

『……………!!』

ラピードはそれに気にせず回避し、もう一度仕掛ける

—— 飛葉翻歩 ——

老人の背後に一瞬で回り込み、決めにかかる

『わん!!』

—— 流影牙 ——

背後から自分の口に啜えた愛刀で斬りかかる

「待ってたぜえ!!」

どうやら攻撃よりも避けることに力を入れていたラピードが自分に接近してくるのを待っていたようだ。
渾身の技で迎え撃ってきた

『がぁぁ！？』

見事なカウンターを喰らいラピードは吹っ飛んだ

「また、負けちゃったねラピード」

「でもかなり頑張ったわね」

「前よりいいところまでいったよね」

「にゃん」

『がっう』

「がっはっは！！若い人にはまだまだ負けてらんねえんだよ。犬っころ！」

この老人は通称「白じいさん」

いつもなのはとラピードが技を練習している森の所有者だ。練習しているところを見つかつて、怒られるかと思いきや。

ラピードの技を見ていた白じいさんが興奮し、木刀を持ってきて戦いスタート

互角の戦いだったが、お互いの決め技を打ち合ったとき白じいさんが打ち勝ち勝利

以来ラピードがリベンジマッチに燃えて、じいさんが来たときには毎回戦っているが。

ギリギリのところでもじいさんが勝っている

「じいちゃんも強いよね。ラピードが負けたところ全然見ないのに」

「ラピードも普通にすごいけどね・・・」

「たしかにどんなことでも人より上手いんじゃないかな？ラピードって」

『わん!』

「へへっ！けど俺には及ばねえわけか。しかし誇って良いんだぜ？
ここまで俺に本気ださせる人間も犬もいなかったしな」

笑いながらキセルを噴かすじいさん。
やはり鳴海にはすごい奴が多い・・・

ラピードがアリサとすずか、井上を助けた日から三人と二匹は親交を深め、今では親友と胸を張って言えるくらい仲が良くなっていた。三人と二匹が出会って、もう少しで一年になる。
今は遊ぶときはほとんど一緒にいる。

「ねえ、おじいちゃん。今度は私に戦い方教えてよ」

「私もやってみたいわ!」

「私もちよつとだけ、興味が・・・」

「にゃ!」

「あん？いや、人気者だなあ、俺は」

『わん！』

「はっはっは！！嫉妬か？犬っころ」

『がっうー！！』

「！！・・・ラピード、そんなに私のことを！」

「あんたはトリップしてんじゃない」

「大丈夫だよラピード、私はラピード大好きだよ。ねっ、井上」

「にゃあん」

「すずかつ！？」

「嫌いなのか？」

「き、嫌いじゃないけど」

「”つんでれ”ってやつか？嬢ちゃんは？」

『わん！』

「やっぱ、そうなのか」

「違うわよっ！-！」

「またまた、照れちゃって」

「照れてないっ！-！」

みんなからかい方をもう理解していた・・・

「今日はこれくらいにしようか」

「そうね、今日はもう帰りましょ」

「それじゃあ帰ろうか」

「にゃん」

「おう！気をつけて帰れよ、お前達！」

「また今度ね、おじいちゃん」

「また、来るわね」

「さようなら、おじいさん」

「にゃあ」

『わん！！！』

「しっかり嬢ちゃん達を守れよ、犬っころ」

『がっ！』

「ありがとね。あんた達も気をつけて帰るように」

「うん、ありがと。それじゃ、またね」

『わん』

ラピードはみんなで遊ぶようになってから、必ず、送り届けてからなのはと帰るようにしている。

なのは曰く、「ラピードが暗くなった夜道は危ないって言ってるらしい

妙にラピードは紳士的だった

今、すずかに井上、アリサを家まで送り届けてなのはと一緒に帰宅している。

「どついたのラピード？」

なのはとラピードは家に帰ってきたが、ラピードが中に入ろうとしなかった

『バウッ！』

「えっ！？」

『わん！』

「出かけるの？ 今から？」

『くうーん』

「…わかったよ。 けどなるべく早く帰ってくるんだよ」

『わん！』

ラピードは許しをもらつとすぐに駆けだしていった

――1時間後

「…遅いなあ」

まだ1時間しか経っていないが、辺りはもう真っ暗だ。
ラピードが強いことは知っているが心配するのだ。
大切な存在なのだから。

『わん!!』

「あつ、お帰りラピード」

やっと帰ってきたかと安堵のため息を一つついた

「もう、遅くならないようにって言ったでしょ？」

『くうん』

「それで、なにやってたの？　こんなに暗くなるまで」

『わん！！』

何をしていたか問われたラピードは、少し元気そうに吼えて、自分の木刀に掛けて有ったビニール袋をなのはに渡した

「これ、花？」

『わん！！』

「…これを取りに行ってたの？」

袋に入っているのは森に生えている花や、見たことない花が袋にいっぱいになって入っていた。

種類はバラバラで統一感なんてないが、花は共通してキレイなものばかりだった。

「…ラピード、もしかして覚えてたの？」

『がっ！！』

ラピードは何を当たり前の事を、というように吼えた

「…そつか。…そつかあ」

なのはの顔に笑顔が浮かんだ、目の端には少し涙が溜まっていた。

『くうん』

「ありがとう。…ありがとうラピード」

今日は…

『わん！』

私たちが出会って…

「もちろん、私も覚えてたんだから」

ちょうど一年だね…

「去年の今日にラピードに会ったんだね」

『わん』

「うん、あの頃より大きくなったよね」

『くーん』

「私は泣き虫なまま？　そうかもね、だってまだ涙が止まんないよ」

ラピードは何も言わずになのはの頬を伝う涙を舐めた。

「もう一回」

『わっ？』

「ありがとう」

その日の夜、ラピードは初めてなのはと一緒のベットで眠った。
隣でもう眠っているなのはの鼻に自分の鼻をちゃんと合わせてから、
背を向けて眠りについた。

オマケ

「私が用意してたのはこれだよ」

『……………』

なのはが手に持っているのはラピードとの記念日にプレゼントする
ために用意した物だ。

「きつと似合うよ。…ほら、おいで」

『…わう』

自分の首にジャラジャラと巻き付けられる首輪。

ラピードは今まで首輪をしたことがない、なぜなら単純に面倒だったらしい。

「やっぱり似合うなあ、カッコイイよラピード」

『…わん』

ラピードも飼い犬が首輪をしている事は知っている。

近所の犬たちとは仲が良いのだ。中にはオシャレな首輪だなと思う事もあった。

『…………』

しかし自分の首に巻かれた首輪は、果たして首輪なのだろうか？

鉛を首に巻かれただけのような気がする、ジャラジャラするし…

「ふふふ」

その怪しい笑みもやめていただきたい。

しかし、自分のために用意してくれたものだ。

素直に嬉しいと思った。

「これで、完璧に私のものだよ？　ねっ、ラピード」

『……………』

聞こえないふりをした…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5416q/>

リリカルなのはin蒼い犬

2011年10月9日21時29分発行